



## 入賞

### 絵本から

岩泉町立小川中学校 3年

竹花綾夏（たけはな あやか）

絵本の題名「つなみ」これは、昭和三陸大津波をえがいた1冊の絵本です。作者は田畑ヨシさん。宮古市田老の方です。この絵本が私の中学校の図書室にありました。

絵本の表紙には、津波に流されていく船、津波にのみこまれている家、そして、どこか悲しそうな女の人がえがかれています。

読みすすめると、津波が来たらかまどの上のれば助かるだろうと思っているほどわずか8歳のよっちゃんの目を通した津波への思いがえがかれていました。この絵本の最後の一文は、「心の中でよっちゃんは海のバカヤローとなんかいもなんかいもさげびました」と結ばれています。あなたは、この言葉に何を感じますか。私は、人間は自然に勝つことはできない、そして、何もできない自分がくやしくてたまらないと感じました。よっちゃんのその後を想像し、言葉が見つかりませんでした。

私は、絵本をきっかけに、ヨシさんのお話をインターネットで調べてみました。

昭和三陸大津波は、15メートルの大きな津波だったそうです。この津波で田老には、36人しか生き残らなかったそうです。そのうちの1の方がヨシさんのおじいさんと絵本からあとでわかりました。あまりにもざんこくな真実でした。白いおひげをはやしたおじいさんからよっちゃんがいつも聞かされていたことは命てんでんこでした。

田畑ヨシさんが語り継いでいる言葉です。一人一人がちゃんとにげればだれも死ぬことはない。初めてこの言葉を聞いたとき、私はなんて無責任

な言葉だろうと思いました。動けない人を見殺しにするようなものだと思います。しかし、この言葉には一人でも生き残れば、またどこかで必ず会える、と考えられます。また、津波の恐ろしさを伝えなければいけない。そして、一人でも多く、津波で亡くなる人を減らさなければいけない。そんな意味がこめられています。命てんでんこは、昔の人からの今を生きる私達への一つの教えであると思います。

東日本大震災から2年半。今までにない、大きな津波が岩手をおそったあの日から2年半がたちます。思い出すのは、とてもつらく悲しいです。しかし、あの日のことを忘れてはいけません。私はそう思います。つなみの絵本は、伝えること、そして、忘れないことを語り継いでいると思います。

私は、津波の来ないところに住んでいます。でも、津波の恐ろしさはメディアなどから伝わってきます。インターネットで映像を見たときこれが現実だろうかと思いを受けてきました。世界一といわれた田老の防潮堤。それを越え、町をおそう津波。言葉を失うほどでした。

昭和三陸大津波、そして、東日本大震災。どちらも岩手に大きな被害をもたらしました。東日本大震災の復興は、まだ続いています。私たちができることは忘れないことです。思っているだけでは解決につながらない考える人がいるかもしれません。でも、多くの人が思いを一つにすれば、現状をかえられると思います。未来の人たちに、安全意識を高く持ち続けてほしいです。

絵本の中のよっちゃんのように、心の中でかなしみをこらえる人がいないように。

#### ○ この主張をどんな人に届けたいですか？

私は、未来に生きる子どもたちに命を大切にすることを伝えたいです。絵本の作者「田畑ヨシ」さんは、三陸海岸の恩恵と豊かさを感じる半面、自然の恐ろしさも体験しています。そこで、言い伝え続けている言葉が「命てんでんこ」です。多くの命や財産が、一瞬のうちに失われてしまった東日本大震災。津波の恐ろしさを多くの人に知っていただき、命を大切にすることを忘れないでほしいです。